

狂言はどういふ手續きで決定されるかといふ、お客には分らぬ幕内の順序が分かると思ふ。即ち「狂言」が出るまでを、讀者の眼前に展開しよう。

十一、文樂座の歴史

今日では人形芝居即文樂座と解して、昔の竹本座、豊竹座以上に文樂座に由緒を附してゐらるゝ方も多いやうだし、且つ現今では確かに「大阪名物」の一つで、文樂座があることには異論がないのですから、文樂座の略歴史をこゝに述べておきたい。

文樂座の創始者は、植村文樂軒といつた淡路國の人です。淡路は淨るりの流行るところ、素人義太夫の輩出するところでした。この植村文樂といふも淨るり天狗の一人で、素義の方の名を文樂軒といつたのでした。好きから人形芝居の興行に手を出したのが始めて、この植村文樂が大阪で人形芝居の小屋を始めたのは、寛政年間と傳へますが、確實なる記録を得ません。高津新地で始めたのが、「文樂座」の發祥の地となりました。勿論文樂座といふ座名はありません。「高津新地の席」です。この高津新地といふのは道頓堀高津附近で、昔でいふ西高津新地三丁目、今日の呼名では高津四番町あたりでもありませんか、見當は道頓堀川南濱側、日本橋東、高津橋の西詰西といふ處です。

この高津新地の席が、今日の文樂座の濫觴であつて、植村文樂は、この道頓堀の東の端に小屋を持つたが、日本橋筋を西へ——即ち盛り場としての道頓堀の中心へと西下しようとしてゐましたが、當時の道頓堀には、興廢常ありませんでしたが、筑後の芝居がある、若太夫の芝居がある、竹田の芝居があるといふ風で、植村文樂軒が西下して淨るりの小座で驥足を伸ばす餘地がなかつたので、當時では——今日でもですが、東寄りの高津新地を捨て、北堀江市の側で淨るりの興行をつゞけてゐます。この時代がどれほど續いたかはハッキリと分らない。——と申しますのは、「北堀江市の側の芝居」で通つてゐる。

此の小屋の興行主が文樂軒であるか、他の誰れかゞ興行してゐたかを判明して、今日では確實に知ることが困難なのです。即ち小屋の呼び名が市の側の芝居であることが、昔からの名で興行主がその時、その時代に代つてゐるのを、ハッキリと今日では知る確實なる記録がないのです。この時代の古番付を手に入れると、よく番付に「文樂茶店」の墨肉の子持の輪廓をとつた印版を捺してあるのを見ます。これが植村興行主である市の側の芝居ですが、年月の期間をハッキリとさせ難いのです。

この間に、道頓堀の興行から、人形淨るりは殆んど驅逐され、道頓堀は歌舞伎の全盛を見せてゐますから、やうやくにして市の側の人形淨るりが、淨るり定小屋として認めらるゝに至つたのです。

その後、文化八年正月に船場博勞町の難波神社、俗に博勞町の稻荷といふ境内に、宮地芝居が出来

た。これが「稻荷芝居」で、植村の興行の淨るり定小屋です。その位置は博勢町の稻荷が今日でも南久寶寺町と博勢町との中ほどにありまして、西から東へと御堂筋へと通する東の傍門がある、この傍門の北側に南向に建てられたのが、植村の定小屋でした。茲で注意すべきは、この時既に御靈地内には淨るり小屋がありますが、後の文樂座とは何の關係もありません。

このいなるの芝居が続いてゐたのですが、天保十二年の水野越前守の改革が、この大阪にも影響して翌天保十三年五月十六日、大阪市中宮地芝居が悉く取拂ひとなつた。そのために植村の興行は、又北堀江市の側へ移りましたが、常打は出来なかつた様子です。

その後弘化二年、西横堀の島の内清水町の濱地に小屋を掛け「濱地々固め」の口實の許に興行を續けることとなつた。これが植村の清水町の濱芝居の始めで、この時の初興行が、同年の二月一日で、「本朝二十四孝」を通し狂言にして、切の付物には、新濱の際物として

西横堀
築地賑
浪花名所記

と名題をおいて、惣嫁場の段をチャリで出してゐます。一つの人気取の興行政策でした。ところが、天保の改革も漸く弛み禁制も自ら解けて來たのを見て、植村の淨るり小屋を舊地の博勢町稻荷東の小屋跡

へ再築しました。これが安政三年九月九日の初日で、紋下太夫が竹本長登太夫、狂言は「鬼一法眼三略巻」が立狂言で、「芦屋道満大内鑑」の狐別れと道行が付いてゐます。

爾來この稻荷境内東の芝居が、「文樂の芝居」と呼ばれて來ました。ところで慶應年間に大阪市内の小遊廓の散在を、風儀の上から取拂ひを命じ、現今の松島に新遊廓地を指定し、この土地の繁榮を計つたがその效が見えませんが、そのうちに明治維新の大變革に會つて、道頓堀の歌舞伎や人形淨るりをこの新開の松島に移さうとしたのが新なる「大阪府」で、芝居仕打の三榮と淨るりの植村に、これを懲憚し文樂の芝居は、今の松島八千代座の所へ新築しました。これが明治五年正月の事で、この時に始めて、道頓堀にも芝居小屋に「座名」が出來、「文樂の芝居」は始めて「文樂座」と名乗つたのでした。それとともに紋下の豊竹湊太夫が退座し、新紋下太夫は五代目竹本春太夫、即ち後の攝津大掾の師匠です。それとともに人形の紋下として春太夫と名を並べたのが、初代吉田玉造で、古來人形の紋下が、この玉造が始めであることは、この稿の始めに縷説しました通りです。この時の出し物が「繪本太功記」大徳寺の燒香の段まで出し、別に「御祝儀三番叟」が出て、二代目越路太夫即ち攝津大掾の若い美聲が人氣を呼んだ。三味線は二代の團平、人形は玉造で、「出遣ひ早替り」といふので花々しくコケヲ落しを開場しました。

が、何としても地の利を失つてゐるのと、今日とは違ひ交通の便を缺いてゐた處から、この新しき「文樂座」は興行成績を十分擧げることが出来ない。興行上香ばしくなかつた十二年間の松島文樂座を捨て、明治十七年九月船場御靈神社境内の寄席を壊して人形芝居の小屋を新築した。これがこの間焼失した文樂座で、御靈文樂座の第一興行は「菅原傳授手習鑑」の通し、大序から大切まで出し「御祝儀三番叟」が、越路太夫、人形は吉田玉造で、丁度十二年前に松島文樂座のコケラ落しと異ひはないが、只三味線の豊澤團平が、豊澤廣助となつてゐます。この御靈の初興行から、二代團平は文樂座を脱退して稻荷の彦六座に入座し、文樂座のためには一敵國をなしてゐます。越路太夫のためには、松島のコケラ落しと狂言が同じ三番叟だけに、感慨無量なるものがあつたと思はれます。

ところで、この豊澤團平の文樂座脱退、二代越路太夫との分離については、從來その理由が明白でなかつた。何故に團平が、文樂の一敵國彦六座に身を投じたかについて、合點のゆく説明が與へられてゐませんでした。只常ならぬ藝人の離合集散位にしか思へなかつたのでしたが、私が今度豊澤團平の遺族の手に残されてゐた反古を取調べるうちに、團平の妻女らか女が書殘した「文樂芝居引一條書」といふ半紙六枚の横綴の日記一冊を發見した事によつて、團平越路分離の曲折が手にとるやうに判明した。私は近世淨りり史上の一大發見だと思つてゐます。それは餘談に互りますから他の機會に述べるとして、

一言にしていへば、團平の賢妻ちか女と、越路太夫の賢妻たか女との賢い女同志の葛藤が、この分離の裏に鮮やかに印されてゐることを見のがしてはならぬのです。この兩賢妻の葛藤、後の淨るり史にいろ／＼な歴史的の意味を與へてゐることは、吾らの興味の津々として盡きないところです。それは餘談として、文樂座は豊澤團平を失ひ且つ彦六座といふ敵を新たに得たのですから、その陣容も御靈への移轉とともに立直した。その一つは古來稀に見る名音と呼ばれた豊竹呂太夫(初代)がこの機會に入座した。この呂太夫はハラ／＼家の呂太夫と呼ばれた素人太夫で、その淨るりの品位は、當代無比であつたのです。ハラ／＼家といふは、それを家號にする藥屋の旦那であつたからの稱號です。

斯くて、爾來二十五年に互つた文樂座の興行は、植村の手で經營されたのであつて、寛政年間の植村文樂軒が高津新地に人形淨るりを興行して以來約百二十年、植村家にしては四代の人々を経て、明治四十二年四月に、文樂座は松竹合名會社に移り、大正六年十二月には、見かはずばかりに小屋の新築が行はれ、その文樂座は、大正十五年十一月廿九日に焼失し、この昭和四年四月に、松竹土地建物興行株式會社が設立さるゝに及んで、松竹合名社の手から松竹新株式會社へと、文樂座の全權利が移つたといふのが、文樂座のざつとした歴史である。

ところで、茲に實際問題として、現在の文樂座の狂言の選擇について、世間の非難がいろいろありま
す。私も別項「人形芝居當面の事」その他において、それらに觸れておきましたが、今日の文樂座の經
營者が人形淨るりの知識——その豫備知識に缺くところがあるために、ますます人形芝居狂言の選擇
を誤つてゐるといふ結果を來たしたことを歴史的に、私は茲に述べたいと思ふ。まづ最近の上演曲目を
御一覽の上、人形淨るり愛好者は、深くこゝに御一考を願ひたいのです。

元來松竹が文樂座を明治四十二年四月に植村の手から引繼いだ時に、松竹には人形淨るりといふ古典
藝術を繼承して經營して行く何等の準備もなかつた。死んだ南部太夫が口を繼いで、植村から凡ての權
利、小屋その他を買つたのでありますが、松竹は歌舞伎同様、小屋と人形遣ひと太夫と三味線彈とがあ
れば營業が續けられるものだと思つてゐたやうだ。固よりそれは、一應はさうであらうが、能樂同様、
相當の豫備知識がなくして、この興行がなるものでないといふことを松竹は豫知しなかつたのです。固
より攝津大掾や三代越路太夫のゐた間は、その紋下といふ權能と、その「藝」から生れる貫祿とで、文
樂座の營業は、松竹の行政事務だけで十分成立を續けましたが、「藝」から生れる貫祿が一朝亡びると、
今日のやうな文樂座の内外に無秩序、下剋上の亂脈状態を呈することゝなりました。私のいふ無秩序と

いふのは、古典藝術の精神を失つて、徒らに形式の末梢にのみ捉はれてゐる現在の状態をいふのです。その一例が假りに狂言を定めるにして、太夫の口にある語り物、人形遣ひの腕に相應する人形の出し物を、今の松竹の誰が知つてゐますか、返答が承りたい。今日の松竹は淨るりの語り場／＼の見定めがつかない。古い番付を繰つては、場割をやう／＼にして割りつける。知らぬ狂言は取扱ひかぬるといふ現狀で、どうして狂言の組合せが立派に出来るものか、噴飯の至りに堪へませぬ。實例を以ていふと、靜太夫が大隅太夫を襲名した時には「辨慶上使」を出す。又大隅の名に對して、靜の大隅の口には九つきりない「壺坂」を強ひて語らさうとするやり方が當今の松竹のやり方です。

或は又、ピラの利く狂言を度々繰返へしてゐる結果が、各太夫の藝が選擇の範圍において自ら狭くなつたからといふ理由で、狭い範圍で各太夫の語り場を變へた。その結果が、昭和四年四月の文樂座の興行の「忠臣藏」です。津太夫に六段目を語らしてゐる。土佐太夫に茶屋場の由良之助を掛合で振つた。古靱太夫には「壺坂」を語らしてゐる。只今の文樂座の三頭目といはれる太夫を、各自にどう殺して使はうかと考へてゐるのぢやないかとまで思はれる語り場の振り方です。これで人形淨るりが興隆するわけもない。そして淨るりで重きをおく九段目が缺如してゐるといふ情ない状態です。

或は又、昭和四年五月の興行を御覽なさい。中狂言に「戀女房染分手綱」が出てゐる。紋下の津太夫

をして「沓掛村」を語らしてゐます。「沓掛村」は御承知の如く、「伊賀越」の「沼津」と同様端場のない「沓掛村」それきりのものです。然るに五月興行には、「沓掛村」に「四條河原の段」といふ端場を貴鳳太夫が語つてゐます。寔に言語道斷のわけで、この河原の段は、丸本を見るとずつと前の序中あたりの端場です。これがこの何の關係もない「沓掛村」の端場に用ひてゐる意が分りません。これを藝道の無秩序といはずして何をか言はんと申したい。

詮ずるところ松竹の無知、松竹の人形淨るりに對する無定見が、この結果を來たしてゐます。この無定見を方針とする無謀を重ねて行けば、人形淨るりは滅亡するより外はない。その滅亡を早めたものは松竹の古典藝術たる人形淨るりに對する無知、無定見、無方針の結果である。すると、人形淨るりを滅さうとするのは松竹であると私は斷言する。

これには歴史的に由つて來る所以があるのです。松竹が文樂座を引受けたが、實をいふと、人形淨るりに對しては西も東も知らない素人でした。例の京都の劇界——興行界を捲席した勢で、大阪の興行界をもその一手に收めようとした若かりし時の白井松次郎の乞食腹には、何んでも詰込まうとした。豚の胃の腑のやうな松竹は、不消化の文樂座をもその胃袋に詰込んでしまつたのです。

が、その當時には文樂座には清水福之助といふ手代がゐた。文樂座と共に清水が松竹に引取られて、

文樂座の興行にその腕を揮ふべきでしたが、明治四十二年四月の「先代萩」が松竹の第一回興行、五月に「伊賀越」を出し、六月は「夏祭」を出した。この三ヶ月を過して、九月の盆替興行には、清水福之助は病歿したのでした。清水といふ人は京の四條の北の芝居——今はありません。現在の南座の向ふ側、東向ひにあつた芝居ですが、この北の芝居の下足番から叩上げた興行の腕と、加ふるに自分も淨るりを語るところから、人形には明るかつたのです。この人に就いてはこんな逸話が残つてゐます。

——當時の文太夫が、濱太夫と一興行預かり師匠の義理合で改名して津太夫になつた今日の紋下が改名の出し物は、「八百屋献立」で、明治四十三年一月興行で竹本津太夫を相續したのですが、この狂言を選定したのが、生前の清水福之助でした。文太夫の語り口を見ますと「帯屋」か「八百屋の新報」を襲名の狂言に出させようと思ひますといつた時に、この相談に預つた攝津大掾の腹にも、文太夫のために選定されてゐた狂言がこの二つであつたとの事です。清水は死んだが、この出し物が採決された。これこそ文樂座の手代が勤まるのですが、清水が歿した跡に、文樂座からの人では福本政吉といふのが清水についだ年功の人であつたが、松竹側からは吉野榮次郎が文樂座の主任となつた。吉野は人形淨るりに素人であつたが、松竹からの人であつたから、福本との仲が良くなかつたので、福本は腕を揮ふ餘地を與へられず松竹の文樂座を去つて、今日はもう亡き數に入つた人です。吉野の下に中村といふ文樂座

譜代のまだ、吉野よりは、淨るりに通じてゐた人が文樂にはゐましたが、これも先年亡くなり、現在の文樂座はこの吉野すらも、兩三年前何かの事情で文樂座を去つて、現在の文樂座主任といふのは新玉勝吉といふが、その任にありますが、新玉自身も申してゐるやうに、人形淨るりには全く素人です。今日の文樂は去らねばならなかつた元主任の吉野が、内々で狂言の選定、場割役割をしてゐるといふ有様である事からして見ても、その無方針、無定見である事に何の不思議がありません。かくして人形淨るりの興隆を望むといふのですから、全くお話しにならない。

即ち私のいふ、松竹の文樂座を引繼ぐ當初において、その第一の準備を缺いてゐた。そして繼承後既に二十二年の歲月が流れてゐるに拘らず、尙斯道の只一人の主任さへも養成が出来てゐない松竹の現状を觀て、文樂座の行末は、この松竹の手に委ねられてゐることは、風前の燈を見るやうに思はれます。これに對する悲觀材料はまだ、山とあるのですから、尙と情ない。

十二、因講の歴史と淨るり神社

鶴澤勝七の弟子で、昔の伊達、今の土佐太夫を弾いてゐた鶴澤友松、即ち今の大隅太夫を弾いてゐる三味線の道八が、彦六座が退轉してから、芝居を引いて神戸で稽古屋をしてゐました。この道八の友松